
見えない恐怖

夢野花香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない恐怖

【Nコード】

N5215T

【作者名】

夢野花香

【あらすじ】

大切な彼女が死んでしまった。幸せだった僕は一瞬にして絶望の底へと落とされる。そんな僕に声をかけてきたのは、一人の女性だった。

Kapitel. 1

彼女の葬儀が終わって、僕は近くの公園に立ち寄った。ベンチに座り、必死に頭の中を整理しようとする。

どうして彼女が死ななくてはいけなかった？ どうして僕は彼女を守れなかった？

信じられるわけがない。人間はこんなに簡単に死んでしまうものなのか？

もうこれからは、僕のそばにいてくれる人はいない。僕に付き合ってくれる人もいない。僕を愛してくれる人もいない。そんなの、信じたくない。

何が起こっているのかわからなかった。頭が酷く混乱している。けれど、夢ではないことだけは心のどこかで理解していた。

そんな時だった。唐突に声が聞こえてきたのだ。

「大丈夫ですか？」 綺麗な女性の声だった。

僕は顔を上げずに呟くように言う。

「大丈夫ならこんな所で頭を抱えていません」

「そうですよね……」

それから女性は何も言わなかった。立ち去ったのかと思い、僕は少しほっとした。一人になりたいのだ、誰も邪魔しないで欲しい。しかし、その女性は立ち去っていなかった。

「私でよければ、話を聞きましょうか」

「……どうしてですか」

「どうしてって……」 女性は困ったように言う。「あなたの顔に、誰かに話したいと書いてあります」

この科白に疑問を持たなかった時点で、僕の精神状態は宜しくなかったと言える。

僕は本当に誰かに話したかったのだと思う。自分で整理できないことがわかっていたのだ。

「・・・・・・・・彼女が火事で死んだのです」

僕は整理しながら話していく。女性は静かに僕の話聞いてくれていた。

「元氣だったのに。信じられません。どうして彼女が、由佳ゆかが死ななくてはいけない。由佳がいなくなったら・・・・・・・・、僕はどうすれば良いんだ」

話しているうちに、涙が溢れてきた。僕は唇を噛みしめる。

「・・・・・・・・死ぬ気ですか」

黙った僕に、彼女が訊く。

「・・・・・・・・わかりますか」僕は溜息を吐いた。「そうしたいんです。死んでも由佳のそばにいたい。けれど・・・・・・・・、自殺なんてしたら、由佳は絶対に許さない。私はまだ生きたかったのに、生きているあなたは自ら命を絶つなんて、絶対に許さないからって・・・・・・・・。由佳がならそう言います」

気の強い人なんですよ、と僕は付け加える。すると、女性は力強く言った。

「それは私も同感です。生きてる人は、生きる喜びがわかってないのですよ」

「でも、生きてたって楽しいことなどないですよ」

「それも同感です。生きるほどつらいことはありません」

女性の言葉に矛盾があることには気がついたが、僕は対して気にしなかった。どうでも良かったのだ。

「僕はこれからどうれば良いのがわからない。由佳がいなくなつた今、僕が生きる意味はなくなったのです」

「そんなことはありません。由佳さんは望んでいるのでしよう、あなたが生きること。それがあなたの生きる意味です」

そうかもしれない。僕は彼女の為に生きてきた。彼女がそう望むのなら、僕は生きるべきなのだろう。

「でも・・・・・・・・、生きてたって何もない。面白いことも何も・・・・・・・・」

「あなたが面白いと感じようとしなからですよ。この世は面白いことで溢れています。死んだら嫌でも実感しますよ」

彼女は苦笑したような声で言う。

「なら死なせてくれよ」

「誤解していますか？私はあなたの自殺を止めているわけではありません。自殺したい気持ちは誰よりもよくわかりますから。でも」

彼女は一瞬言葉を切った。「リストカットはやめた方が良いでしょう」
「……そうか」

「今は飛び降りにや首吊りにすれば良かったと後悔しています。リスカなんてするんじゃないかった」

「……もしかして、」

「あなたは、自殺経験者ですか」

僕の質問に、女性は恥じるわけでも躊躇うわけでもなく頷いた。

「はい」

「リスカを？」

「ええ。経験者として、これはお勧めしません」

「そうですか……」

「飛び降りますか？」

「……いや、自殺はしません。由佳が怒りますから」

僕は肩を竦める。けれど、前を向くには時間がかかりそうだ。

そう言うと、女性は笑うように言った。

「それで良いんじゃないですか。死んだ人間にとって、生きている人間が泣いているのを見るのは悲しいですが、それなりに嬉しいんです。だって、自分がいなくなって悲しんでくれる人がいるって幸せでしょう」

「そうですか」

「私はそうでしたけど、由佳さんはどうでしょう？もしかしたら怒るかもしれませんよ」

女性は笑いながら言う。きっと冗談だったのかもしれないけれど、流石に僕でも気がついた。私はそうでした、って？

僕はそつと顔を上げる。冷たい風が僕の頬を叩いた気がした。どうということだ。公園には誰もいなかった。

帰ったのか。僕は一瞬そう思ったが、そんなわけがない。何故なら、足音が全くしなかったからだ。

待てよ待てよ。そもそも、足音なんて一切聞いてないぞ。女性が近づいてくる音さえしなかったんじゃないか？

僕はなんとなく、血の気が引いていったような気がした。確かにそうだ。気が動転していたけれど、これは確かだ。足音なんて、一切聞いてない。

僕が頭を抱えたのを笑うように、彼女の声が聞こえてきた。

「私なら後ろにいますよ」

僕ははつとする。そうか、後ろか。

僕は動揺を恥じるように苦笑しながら言った。「僕、結構堪えてるんですね」そして後ろを向く。

固まった。文字通り、僕は固まった。顔に笑顔を張り付けたまま。どうということだろう？僕は冷静を維持しようと、笑顔を張り付けたまま自問自答する。これは、どうということだ？

後ろに女性の姿なんてない。というか、実際気配など全くしていないのだ。後ろにはただ、木々が並んでいるだけだ。

僕は勢い良く立って、周囲を見渡した。

誰もいない。声もしない。冷たい風が全身を包んでいるだけだ。

夜の公園は寂しいと改めて実感するように、僕は暫く公園内を見渡していた。

女性が去ったとは考えにくい。僕は恐る恐る口を開いた。

「あの・・・・・・・・どこにいますか」

案の定、女性は去ってはいなかった。「ここにいますよ」

こういう時一非現実的なことが目の前で起きたとき、人間はどのような対処をすれば良いんだろう？

無視するべきか？精神科にでも行くべきか？僕は幻聴まで聞こえる程気が動転しているのか？

彼女の声だったら良かったのに。なんて僕は少し思った。

気を取り直して、僕は大きく息を吐いて訊いた。

「・・・・・・透明人間ですか」

僕は半ば真剣に言ったつもりなのだが、女性は笑い飛ばした。

「まさか。まあ、近いものかもしれませんがね。どちらかと言うと幽霊に近いですけど」

ゆうれい？あの、死者の魂がどうのこうのって言う、あれか？

僕は首を振った。

そんなわけがない。幽霊なんているはずがない。いや、幽霊はいても良い。だが、幽霊と会話をしているというのは認めたくない。

「驚かれました？」

女性は無邪気に言う。驚くなんてもんじゃない。幽霊を前にして、幽霊と会話をして、驚くぐらいで済むわけがないだろう。もしも驚きもしないというなら、それは幽霊を信じていないのだ。実際に幽霊に会って話してみろ。腰が抜けるかもしれないぞ。

「・・・・・・本気で言ってます？」

僕はどの方向を向いて良いかわからず、空を見ながら訊いた。

よく聞くと、彼女の声はどこからともなく、響くように聞こえてくる。

「本気ですよ。というか、揺るぎようもない事実ですから」

「夢じゃないですか？」

「それはあなたの判断に任せます。あなたがこれを夢だと思うのならそれで良いです」

正直、はつきりと現実だと言ってほしかった。今の僕に自己判断力が欠けているというのは、わかるんじゃないのか。

「・・・・・・君は、自殺したのに生き返ったと言うのか？」

「そんなところです。正確に言えば、魂だけこの世を漂うことになってしまったわけですが」

「……………意味がわからない」

僕は再びベンチに腰を掛け、頭を抱えた。

何もかも放り投げなくなってきた。彼女を失い、幽霊と出会うなんて。僕が何をした？神様とやらに何か反感を買うようなことをしたのか？

「できる限りでしたら説明しますよ」

女性は遠慮がちに言う。少なからず、僕のことを心配してくれて
いるらしい。

聞きたいことは沢山ある。けれど、まず聞きたいのは、

「君の声は、誰にでも聞こえるんですか」

「ええ」

「いつだったかに、僕の家近くの小学校で、授業中に正体不明の
叫び声を聞いたという騒ぎがありましたか」

「ああ、それ私です」

女性はあっけらかんと言う。あの騒ぎで小学生が泣き出したとい
うが、悪気はあるのだろうか？

「今までに誰かに話しかけた経験は？」

「ありますよ。けれど、みんな幻聴かと首を捻るくらいで、私に気
がつかないんです」

そりゃあそうだ。幻聴くらい、よくある話だろう。それを幽霊が
いると考える奴なんてそうはいないはずだ。

「じゃあ、僕に話しかけたのは……………」

「あなたがあまりに可哀想に思えたんで、つい」女性はえへと笑
う。

「……………そうですか。では、僕はこれで」

僕はどこにいるかもわからない相手に、お辞儀をして、回れ右を
して帰ろうとした。

とにかくここから離れるべきだ。というか、女性とは関わらない
べきだ。

そんな僕の気持ちを察してるのかなんなのか、女性は無邪気に言

った。

「私もついていって良いですか？」

Kapitel. 2

嫌だ、とはっきり言いたかった。あなたとは関わりたくありません。もう僕とは関わらないで下さい、と。

けれど、言えなかった。頷くこともできなかった。ただ、何も言わずに歩きだした。

とにかく疲れていた。早く帰りたい。そんな気持ち優先されたのかもしれない。

何も言わずに二十分程度歩いて家に着いた。幽霊がついてきたのかはわからない。気配も声もないのだ。

家のドアを開けたら、彼女の声がしてくるような気がした。おかえりなさい、と。

けれど、そんな希望も儚く消えて、薄暗い玄関があるだけだった。彼女を失うということが、僕にとってどれだけの光を奪うことと等しいのだろうか。考えただけでも怖くなる。彼女が光であり全てであった僕は、これからどうなっていくんだ。

「綺麗な部屋ですね」

僕は飛び上がった。いるかもしれないと思っていても、突然声が聞こえると驚く。

実際、今幽霊がどこにいるかはわからない。部屋のどこにいるのかも、僕の近くににいるのかも。

「……荒らさないでくれよ」

僕は気落ちした声で言うと、幽霊は困ったように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。私には実体がありません。つまり、物に触ることができないんです」

「そうか……」

ソファに座ったとたん、疲労感がどっと溢れてきた。もう動きたくない。このまま寝てしまいたい。

そして、起きたときには彼女がいて、勿論幽霊なんていない生活

があるんだ。

僕はふっと笑った。これが夢じゃないことくらいわかっている。彼女が死んだのも、今こうして幽霊がいるのも、紛れもない現実だ。それでも人間というのは、自分の良いように将来を夢見てしまう。彼女以外の女を勝手に家に入れたら彼女は怒るかもしれないなど、僕は意識が途切れる前に思った。

寝起きはとっても悪い。どうしてか僕は、幽霊に起こされることになってしまったのだ。

「朝ですよ、起きて下さい。電話ですよ」
綺麗な声だけれど、幽霊だと思うとどうも複雑な感じだ。声というのは作れるものだ。顔が見てみたい。

渋々頭を働かせる。電話というのは本当らしく、電話の着信音が響いていた。

カーテンの隙間から日が射し込んでいる。朝だ。

ああ、昨日あれから本当に寝てしまったんだ。喪服に皺がついてるし、髪はぼさぼさ。風呂にも入ってなかったつけ。

僕は我に返って、急いで電話に出た。何コール鳴らせたかわかったもんじゃない。

「あ、もしもし」

『岩渕？大丈夫か？』

声でわかった。仕事仲間の鈴木だ。

「あっ、仕事……」

僕は小さく呟く。すっかり忘れていた。

反射的に時計を見る。しまった、完璧に遅刻だ。

『大丈夫だ。店長も知ってるから。暫く休めって』

「ああ……」僕はつい溜息を吐いた。「すまない」

『仕方ないだろう……。まあ、ゆっくり休め。一週間くらいは大丈夫だって店長言ってたぜ』

「そうするよ」

『お前、寝起きだろ？悪かったな、起こしちゃって』

「いや、大丈夫だ。こっちこそ手間かけさせちゃってすまなかった」
気にすんなど、鈴木は笑って電話を切った。

「・・・・・・仕事大丈夫ですか？」

どこからか声がする。

まだいたのかと、僕は先程よりも大きな溜息を吐いた。「・・・・・・

・大丈夫だよ。休みを貰ったから」

「良かった」幽霊は心底安心したような声を出す。「あれ、どこに行くんですか？」

「風呂」

僕が言うと、幽霊はぼつと頬を赤らめたように言った。「あ、そうですね・・・・・・」

それから幽霊がついてきたかわからない。あの口調だと避けてくれそうな気もするが、どうでも良い。

僕はシャワーを浴びながら考えた。

これからどうする？あの幽霊はいつまでここにいる気だ？といふかなんとなく、僕はあれに気に入られているような気がする。

追い出そうとして追い出せるものじゃない。まず、僕はあれがどこにいるかさえ把握できないのだ。

どうすれば良い？

答えなんて見つからない。まだ彼女を失ったショックから立ち直れていないのだ。

「自己紹介がまだでしたよね」風呂から出ると、幽霊は楽しそうに言った。「私、田柄望美たがらのぞみと言います。生きていれば二十二歳ですよ」

二十二か。僕と一つしか変わらないじゃないか。

「死んだら歳をとらないんです。死んだのが三年前だから、精神年齢は十九歳ですね」

三年も経っているのか。

「・・・・・・・・あなたは？」

幽霊が訊いてくる。

「・・・・・・・・岩渕敢太^{かんた}」僕は渋々答えた。

「敢太さん、ですか」

何故か、幽霊の声に元気がなくなった。

「・・・・・・・・大丈夫かよ？」

あの幽霊は、本当にずっといる気でいるらしい。あれから一週間経ったが、出ていく気配など全くなかった。

僕は仕事に復帰し、その間幽霊がどこにいるかはわからない。休憩中、鈴木が心配そうに顔を覗かせた。

「大丈夫・・・・・・・・と答えない」

僕の答えを、彼は大丈夫じゃないと受け取ったらしい。深刻な顔をして言った。

「もう少し休んでも良かったんじゃないか？」

「いや、それは良い。家にいたって悲しくなるだけだ。お金も必要だから・・・・・・・・」

幽霊のことを知らない鈴木は、多分誤解しているんだと思う。わかってはいたが、誤解を解こうとは思わなかった。

「・・・・・・・・お前さ、幻聴って聞いたことあるか？」

口が勝手に動いていた。その前にしっかりと時計を見て休憩時間があることを確かめたけれど。

「幻聴？ いや、特には。幻聴つつたらあれだろ。小学校で起きたあれ」

鈴木が言いたいのは、あの幽霊が起こした騒動のことだ。

「鈴木はあれ、どう思ってるんだ？」

「んー、俺もよくわからねえんだよなあ。でも、一人だけじゃなく、少なくともクラス全員が聞いているんだろ。ただの幻聴じゃない気も

するよな」

「幽霊とか、そういう類だと？」

「さあ？けど、いきなりどうしたんだ？」

鈴木は信頼できる。口も堅いし、頼れる存在だ。

話してやりたかった。あの騒動は幽霊のせい、その幽霊が自分の近くにいたんだと。

けど、そんな簡単に話して良いのだろうか？というか、話すべきなのか、話してはいけないのか。それがわからない。あの幽霊は何も言っていなかった。

「岩渕？」

鈴木が心配そうに僕を覗き込んだのと同時に、休憩時間が終了した。

Kapitel. 3

「で、なんで家までついてくるんだよ」

「心配じゃねえか。お前、絶対何か抱えてるだろう。そしてそれを誰かにぶちまけたくてしょうがない。違うか？」

違うか、と問われたら、僕は即答しよう。違わない、と。

確かに、誰かにぶちまけてやりたい。

僕は、鈴木を家に招き入れた。

「幽霊の存在。鈴木なら信じるか？」

「……まあ、岩渕がいると言うなら」

鈴木は、唐突に言った僕の言葉に驚きを示さなかった。予想していたのだろう。

「僕は……、いると思う。というか、断言できる」

「会ったのか？」

鈴木の問題に、僕は首を振った。「会ってはない。声を聞いただけ」

「……彼女の、声じゃなくて？」

「違ったよ。知らない人」

「んじゃあ察するに、あの小学校の騒動もその幽霊の仕業だと？」

僕は頷いた。

「へえ……。その幽霊、今どこにいるんだ？」

「さあ……。人間には見えないんだよ。声しか聞こえないってわけ」

「じゃあここにいかもしれないってか？」

鈴木が部屋を見渡す。そして小さく呟いた。「汚ねえ部屋」

「うるさい。まあ、いるだろうよ。あの日からずっといるし。おい、いるんだろ」

僕が空に向かって呼びかけると、暫くしてあの声が聞こえてきた。
「ええ。いますよ」

このときは流石の鈴木も驚いたようで、きよろきよと満遍なく部屋を見回す。それでも、幽霊の姿を捉えることなんてできるはずもなく。

「まさか、他人に私の存在を言うとは思いませんでした」

「一人で抱えられるもんじゃない」

「そうですかね」幽霊は笑う。

僕は鈴木に、幽霊との馴れ初めを話した。鈴木は感心したように僕を見る。

「まさか一生の中で、幽霊に会えるなんて思ってもなかったよ」

「あら、幽霊はそこらへんに沢山いますよ。ただ、みんな人間には姿が見えないから、声だけ聞かれて怖がられるのを避けてるんです。本当は仲良くしたいのに」

仲良くって、人間と幽霊がどうやって仲良くなるんだ。というか、仲良くなって何をすると言うんだ。

僕は心の中で呟く。

「じゃあ俺の周りにもいるわけ？」

「いるかもしれないですね。見てないのでわかりませんが」

そういえば、幽霊にとって視覚情報はどこから入ってくるんだろう？視覚情報だけじゃない。人間の五感と呼ばれるものは、幽霊にはどうやって……

「仲良くしたいなら、話しかければ良いじゃないか」

首を傾げる僕を無視して、鈴木は普通に幽霊と会話している。

「無理ですよ。人間って、自分の理解できないことは拒否してしまうものでしょう。なかったことにしてしまう人だって多いわ。突然声が聞こえたら、誰だって気味悪がりますよ」

気のせいかな、幽霊の言葉には棘がある。そういう経験があるのかもしれない。

「ですから、できるだけ私のことは言わないで下さい」

鈴木は圧されたように頷いた。

あれから一年くらいが経ってしまった。すっかり幽霊との生活に慣れてしまったのには、彼女になんて弁解すれば良いのかもわからない。

「そういえば、彼女が幽霊となって現れるということはないのか」
ふと思つて、僕は望美に尋ねてみた。すると、望美はあっさりと答えた。

「可能性はあるでしょうね。私だってこうして存在しているのですから」

「幽霊にはどうやったらなれるんだ？」

「さあ？ 本当は、自殺した私が幽霊なんかになってこの世に存在してしまうのはどうなのかと思いますけどね」

事故で亡くなられた方が幽霊になるべきなのに、と望美は静かに言う。自分が幽霊として存在していることを、どこか怒っているような口調だった。

「でも、私、幽霊となってこうしていられて、嬉しいです」

「え？」

「敢太さんと一緒に暮らすようになって、私幸せですよ」

僕は微笑んでいた。

認めたくなくなったけれど、僕の中には、彼女よりも望美の存在が大きくなっている。少し悔しいけれど、事実だと思うしかなかった。

「……目の前にいないものを愛するって難しいな」

つい呟いてしまった。すると、望美は笑った。「そんなもんですよ」

「……そうか」

鈴木は重々しく口を開いた。

彼女よりも望美の存在が大きくなっていることを打ち明けたのだ。

「一年近く経ったもんな」

「彼女が嫌いになったわけじゃない。だけど……」

僕は俯く。だけど、僕は……。

「仕方ないんじゃないか。いつまでも故人を想い続けるっていうのも難しいもんな」

「良いのかな……」

「あの子だったら多分、いつまでも私なんて想ってないでさっさと別の恋を探さない、くらい言いそうだけど」

確かにそうだ。彼女なら言いそう。

僕は単純だったのかもしれない。いや、単純だったのだ。そうじゃない。やなかったら、僕は幽霊なんかと親しくなるはずがない。

僕は幽霊を侮っていたんだろう。自覚はなくても、心のどこかで知る由もなかった。幽霊の目的を。奴が、何を企んでいたのかを。そして、僕が彼女をどれだけ傷つけたのかも。

Kapitel. 4

僕は、あの幽霊がいかに冷酷無惨で自分勝手な奴だったかをたった一日で知ることになった。一年近くも一緒に過ごして心も開きかけてきた僕にとって、それは酷い仕打ちだ。

始まりは、一本の電話からだった。

昨日の金曜日は遅くまで仕事をしていて、帰ってきたのは日付の変わった一時頃。寝たのは二時過ぎだった。結果的に僕は、翌日の土曜日の昼間に電話の着信音で眼が覚めたのである。

・・・・・・おかしい。

僕は眠る頭を動かしながら思った。

望美の声がしない。というか、最近は感じるようになった気配さえない。

電話が鳴っていれば、あれは僕の耳元で必要以上に大声を出すというのに。

首を傾げながら電話を出ると、相手は鈴木だった。

「おー、どした？」

『岩淵か！？おい、大変だ！今すぐ俺ん家来れるか！？』

鈴木は、僕が電話に出るや大声で叫んだ。おかげで一瞬で眼が覚めた。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて」

『話した後だ！大変なことが起こってるんだよ！良いからさっさと来い！』

鈴木の声には、焦りが混じっているように思えた。

かつて鈴木がこんなに僕を急かしたことがあっただろうか？僕は鈴木に気圧されて、大至急で出かける支度をして家を飛び出した。

鈴木の家まで走れば十分前後で着く。僕は全速力で走った。息を切らせる僕を見ても鈴木は気にしないでともいうように、僕を強引に部屋へ連れ込んだ。

「どうしたって言うんだよ。何があったのさ」

動揺する僕をソファに座らせると、鈴木は僕の質問には答えず周囲を見渡して言った。「あの幽霊はいるか？」

「え。いや、ここにはいないと思うけど」

僕の答えに安心したような顔をする鈴木。

「・・・・・・・・何があった？」

僕は恐る恐る訊く。すると鈴木は空に向かって呼びかけた。

「おい、大丈夫か」

「ーうん・・・・・・・・」

一瞬で全身が動かなくなった気分になった。息苦しくなって、頭は混乱する。眼を見開いて、僕は硬直した。

他の誰でもない。

「由佳・・・・・・・・？」僕は呟いた。

忘れるはずがない。この声を。僕が忘れるわけが・・・・・・・・。

「敢太」彼女の、声だ。絶対に。

僕は頭を振った。何が起きている。どういうことだ。

「彼女も・・・・・・・・幽霊になってたらしい」

鈴木が遠慮がちに言う。

「でも、あれからもう一年くらい経ってるのに・・・・・・・・」
今更なんだ？どうして今更・・・・・・・・。

「一年くらいの時間が必要だったの」由佳がはっきりと言う。

「どういうことだ？」

鈴木が尋ねる。鈴木も聞いていないらしい。

「田柄望美」

鈴木の質問を無視して由佳が言った。僕はどきっとする。

「ねえ敢太。覚えてないの？この名前を」

「え？」

由佳の言葉に、僕は暫く考えて叫んだ。

「知ってるのか」

鈴木が驚いたように僕を見る。

「大学の後輩だ！なにかと僕に付きまといてきて。僕が由佳と付き合っていると知ったとたんに嫌がらせを始めたあの……」

まくし立てて、僕は口を噤んだ。

あの幽霊が、あの田柄だと言うのか？

僕に一目惚れをしたとかで、必要以上に僕に近寄ってきた田柄。何度も断ったのに懲りずに告白してきた田柄。無視しても嬉しそうに僕についてきた田柄……。

「私が死んだとき……。あの子は喜んだでしょうね。邪魔だった私がいなくなった今、誰も自分を邪魔するものなんてない。私が死んだことでショックを受けている敢太に近づいて、敢太が心を許すまで側にいれば良い。実際、あの子の思い通りだった」由佳は静かに言う。「私が幽霊として存在したときには既に、あの子は敢太の周りに結界を張ってたわ」

「結界？」

「そう。だから、私は敢太や鈴木さんとううやって話すことができなかったの。結界を壊すほどの力を、私は持っていないから」

「じゃあどうして今は……」

「結界を張るということは、力を使うということ。長時間張り続けるのは無理があるのよ。丁度今日、結界を張るのに限界がきて、今は結界が張られてないの。今あの子はメンテナン스에でも行ってるんじゃないかな」

由佳は、ふうと息を吐いてから声のトーンを下げた。

「……結界が張られててもね、中の様子はわかるのよ」

「え」

「敢太、あの子の思い通りになってたね」

「……」

「私のことよりも、あの子のことを想うようになっていた」

由佳の冷たい視線を感じる。僕は泣いてしまいたかった。

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

なんて言ったら良いかわらなくなってきた。僕は愚かだ。あんな奴に簡単に操られて、手の中で転がされていたんだ。

あの幽霊と初めて会ったときだって、あれは楽しそうだった。恐怖なんて一切なく、きっと僕の弱さを知っていたんだろう。僕が心を許してしまうということも、あれにとっては必然だったのだ。

「今でも、あの子のことが好き？」

姿が見えてたら、きっと首を傾げながら上目遣いに僕を見上げていたに違いない。そんな可愛らしいような不安そうな声を、由佳は発した。

僕は即首を横に振る。

「それはない！絶対じゃない！やっぱり由佳が一番だよ。由佳が……」

不意に、由佳の姿を思い浮かべてしまった。今すぐ抱きしめたい。この腕で、彼女の全てを抱いてやりたい。

でも、それはもうできないのだ。こんなに近くに由佳を感じるのに、それを実感することができないのだ。

僕は嗚咽を殺して涙を零して。

由佳への愛情が溢れて止まらない。どうして由佳は死ななくてはならなかったんだ。

「敢太……」

鈴木がそっと背中をさすってくれる。由佳が悲しそうに言った。

「何よ、この空気。最悪ね」

唐突に声が聞こえてきた。これはこれで忘れないであろう。あの田柄の声だった。

Kapitel. 5

「田柄……」

僕は涙をそっと拭って呟いた。「全部計算通りだったのかよ……」。僕に声をかけたのも、あの親切も。全て作り物だったのか」

「そうよ」

幽霊はさりと云った。何事もないかように。

「全部計算通り。今まで思うままに進んできたのに。またこの女？　なんであんたまで幽霊になってんのよ。あんたはいつも私の邪魔ばかりするよね。本当に消えてほしいんだけど」

見えないんだから消えてるようなもんか、と幽霊は鼻で笑った。

幽霊の口調が一変している。

由佳は黙っていた。

「でも敢太さん？　私のこと、好きになってくれたでしょう？　こんな女なんて忘れて、少しでも私を好きになったよね？」

幽霊は誘うように僕に言う。僕は罪悪感でいっぱいになった。

そうだ。こんな奴に。僕は好いてしまった。由佳のことよりも、こんな奴のことを想ってしまった。全て奴の仕組んだレールの上をただ流されるままに進み、挙げ句の果てになにも知らずに奴を想うようになって……」

「違う、そうじゃない……」

そうじゃない。そんなの認めたくない。

「この女がいけないのよ。この女さえいなかったらこんなことにはならなかったんだから。私頑張ったわ。一年間。敢太さんに好きになってもらうように」幽霊は溜息を吐きながら言う。「どうして私が自殺したかわかる？」

鈴木が僕を見る。僕は素直に言った。

「知るわけないだろう」

「私と敢太が付き合い始めたからよ」

由佳が冷たく言い放った。

「・・・・・・・・え？」

「この子が自殺したのは三年前でしょ。私たちが付き合い始めたのも三年前じゃない」

そうだっけ。

「自分に振り向いてくれないと知ったこの子は、絶望した・・・・・・・・」

「よく覚えてるな・・・・・・・・」

僕が言うと、由佳は苦笑した。

「そりゃあ、忘れるわけないわ。だって、私この子から嫌がらせ受けてたんだもの」

・・・・・・・・は？嫌がらせ？受けてたって？由佳が？

「敢太と付き合うなんて許さないって。家に押し掛けられたり、脅迫みたいなこともさせられたわ。それでも私と敢太は別れなかった。だから自殺したんだよ」

初耳だった。そんなことを・・・・・・・・？

「マジかよ・・・・・・・・。おい田柄、その話本当なのかよっ」

僕は怒鳴った。

幽霊に騙されていたこと。幽霊の思い通りに自分が動いていたこと。いろんなことが僕を苛立たせていた。

由佳に嫌がらせをしていたというのを許せるはずがない。けれど、それに気がつけなかった自分にも腹が立った。

「本当よ？だって、ムカついたんだもの。敢太さんと合うのは私。私以外の女なんて認めないわ」

幽霊はさりと云った。

「ムカついた？それは僕の台詞だよ。僕は今、お前にすっごいムカついてる」

僕は一生懸命に気持ちを落ち着かせて言った。

相手の見えない状況で自棄になるのは危ない。多分、僕は幽霊に勝てないのだから。

「……………どうして？私の何がいけないの？私はただ敢太さんと一緒にいたただけなのに」幽霊の声が途端に小さくなる。「敢太さんに認めてほしかった。それだけなのに。どうして私じゃ駄目なの？」

僕は怒りが静まっていくのを感じた。幽霊の言葉は震えていた。

「それは……………」

「性格」

僕が答えに戸惑っていると、由佳がきっぱりと言った。

「その性格を直さない限り無理よ。よくもまあ、そんな演技ができること。姿が見えないからって調子に乗ってるんじゃない？」

「ち、違う。本心よ」

「どうだか。そうやってまた敢太を騙そうっていうんでしょ」

「……………あなただって調子に乗ってるんじゃないの。敢太さんに気に入られてるからって」

「田柄」

僕は幽霊を遮った。幽霊が肩を震わせたように思えた。

「悪いけど僕は由佳以外に考えられない。もうやめよう。こんなの、終わりにしよう」

僕は静かに言った。幽霊は何か言いたげに口を開いたが、何も言わなかった。

なにもかも終わらせたい。中途半端でも良い。もうどうでも良いから、早くこの関係を断ち切りたかった。

「……………絶対に、ですか？少しでも私を、」

「絶対にだ」

僕は強い口調で遮る。幽霊はショックを受けたようだった。

「……………そう。じゃあ仕方ないね……………」

鈴木が小さく溜息を吐いた。安心したのかもしれない。

もう終わりだ。なにがなんでもこの幽霊とは別れるんだ。人間と幽霊でも、由佳とは心が繋がっている。大丈夫だ。これからやっていける。

「……この手は使いたくなかったのだけど」

幽霊が小さく呟いた。

聞き返すよりも早く、僕は何者かに首を絞められていた。

「ぐああ……っ」

「敢太っ！」

「岩淵!？」

僕は幽霊に首を絞められていた。それも、中途半端な力で。

どうしてだ。幽霊は実物に触れないんじゃないのか。

僕は首のあたりの空を掴む。本来そこにあるはずの手はなかった。

「こんなことしたくなかったのよ。でも、敢太さんが悪いんだもん。私のことを見てくれないから。だったら、最後に私の手で殺してやる」

幽霊の低く鋭い声が頭の中で響く。

殺されるのか？このまま、僕は。

「どう……して。触れ、る……」

僕は必死で言葉を発する。すると、幽霊はくすくすと笑った。

「触る、っていう表現は間違ってますよ。実際、私触ってるわけじゃないもの」

私にもよくわからないんだけど、と幽霊は肩を竦めるように言う。僕の首を絞める力が少し弱まった。とはいえ振りほどけるものでもないし、苦しいのには変わらない。

「確かに私の意志で物に触れることはできるんだけど、私に触れてるっていう感覚はないんですよ」

楽しそうに幽霊は笑った。

幽霊の言うことが理解できない。理屈じゃなくただ単純に、幽霊の言葉の意味が頭の中で変換されない。

「やめて……やめて!」

由佳の悲鳴が耳に届いた。

「これで敢太さんは幸せになれないでしょう。ねえ敢太さん、悔しいでしょう。愛する人と一緒にいられなくて。私は絶対に嫌よ。敢

太さんが私以外の人と幸せになるなんて絶対に許さないから」

僕の首を絞める力が、再び強くなった。しかも、先程より強くなっている。

僕に限界がきたようだった。視界が白く染まっていく。声が聞こえるけれど、もう誰の声なのかもわからない。誰かの声が、頭の中で反響している。

耳に残っているのは幽霊のあの狂った笑い声。

嫌だ、嫌だ。どうして僕が田柄に殺されなくてはいけないんだ。ふざけるな。

僕は必死で抵抗するが、所詮水の泡。

「あああああああっ！」

目の前が真っ白になり、僕の中から力が抜けていく。最後に耳に残ったのは、誰のものかもわからない悲鳴だった。

Kapitel. 6

ぼうつと、何かが映った。何かが見える。白い壁、天井……。

頭が痛い。視界も揺れたまま定まらず、僕は眼を閉じた。

何もわからない。とにかく頭が痛くて、僕は眉を顰めて大きく息を吐き出した。全身に酸素が行き渡っていく。呼吸ができるなんて、なんと幸せなことだろう……。

生きてるのか？それとも僕まで幽霊になってしまったのか？僕は自問自答する。幽霊じゃない。少なくとも体がある。

感覚が戻ってきた。頭痛は相変わらずだけれど、僕はそっと眼を開けた。

家だ。僕の家。病院じゃない。

何がどうなっているのだろうか？僕の記憶が正しければ、僕は田柄に殺されたはずなのだけど。

起き上がってみた。一瞬こそ重く感じたものの、動こうとしてみたら体はスムーズに動いてくれた。

家の中にはただ平穏な空気が漂っているだけ。何事もなかったかのように。全て夢だというように。

……嘘だろう？全て夢だと言うのか？由佳も幽霊のことも？

「こんな夢オチ、物語として失格だろ？」

僕は声に出して言ってみる。なんだか空しくなった。

ふと思いついて、僕は洗面所へ駆け出した。鏡だ、鏡。

僕は首を絞められた。それも、意識が途切れるくらいに。もしかしたら索条痕でもあるかもしれない。

鏡に飛びついて、僕は硬直した。痕と呼ばれるものはない。無論、赤くもなっていないかった。

僕は文字通りその場に崩れた。何も考えられず、何も理解できず、

何もできない。

全部夢だった。

一言で終わることじゃないか。なのに、どうして、納得ができないだろう。どうして、こんなのにも……。

思考が鈍くなってきたとき、家の鍵が解除された音がした。

「……………え？」

誰だ？ 僕以外にこの家の鍵を開けられる人なんていないぞ？

……………泥棒？

直感的に隠れようと思った。なんとも間抜けな話。

ドアの開く音がして僕は真剣に焦った。ナイフでも持っていたらどうしよう。

「入るぞー……………」

声がした。泥棒じゃない。泥棒なんかじゃない。この声は。

「鈴木！」

僕は洗面所を飛び出した。

「うおっ。岩淵！ 目が覚めたのか！」

「鈴木……………」

鈴木は飛び出してきた僕に驚いて後ずさりした。彼は紛れもなく鈴木本人だった。一時は安心するものの、再び不安が込み上げる。

「何が、あったんだ……………」

鈴木の様子が曇ったことに、気がつかないわけがなかった。

「とりあえず中に入ろう。な、それからでも……………大丈夫だから」

僕が鈴木を問い詰める前に鈴木は考え込んだ顔で中に入っていく。それは一層僕の不安を濃くさせた。

「ああ、そういえば鍵さ、勝手に借りたよ」鈴木は明るい声で言う。

「お前、気がついてるか？ 一週間近く寝たきりだったんだぞ」

「え？ ええええ！？ うそだろ？」

「マジだって。だから仕方なく俺がお前の面倒を見てやったんだろ
うが」

鈴木は自分の家のように堂々とソファに座る。部屋を見回して見るとある程度部屋が綺麗になっていた。と言いたところだが、正確には鈴木があらゆる物を部屋の隅に押し込んだらしかった。

「・・・・・・・・夢か？」

「は？」

僕の唐突な質問に、鈴木は素っ頓狂な声を上げた。

「あー、ほら。僕、何か寝てみたいだけ。別に大したことがあったわけじゃないんだろ？」

「そうしとくか？俺はそれで良いけど。というかむしろ、お前にとってはその方が良いと思うけどさ」

実に含みのある言い方だった。

「・・・・・・・・知りたい」

小さく、消えそうな声で僕は言った。知りたい。あの後、何があったのかを。

「本気か？多分ショックは大きいぞ。お前、理性を保てるか？」

鈴木はつらそうな目で僕を心配そうに覗き込む。それでも僕は頷いた。

「・・・・・・・・お前、どこまで覚えてる？」鈴木は諦めたように口を開く。

「田柄に首を絞められたらしいところまで」

「だよな」と、鈴木は溜息を漏らした。

「・・・・・・・・単刀直入に言うか？それとも遠回しに言うか？」

「じゃあ、単刀直入に頼む」

「・・・・・・・・ああ」

ふう、と鈴木は大きく深呼吸をして、目を伏せた。俺にもよくわからないんだけど、と前置きをして。

「あれから、というかあの直後、お前の彼女さんが田柄とか言う奴を殺したらしんだよ」

「・・・・・・・・」

鈴木の言葉は、僕に真っ直ぐ届いてこなかった。

「正確にいうなら、俺にはただ唐突にお前が倒れたことしかわからなかった。その後、彼女さんが教えてくれたんだが、焦ってたのかあまりに早口でな。多分、彼女さんが田柄を押さえつけてそのまま強引に成仏させた、みたいな感じだと思う。だがそれは軌道に外れることとかなんとかで、彼女さんもそのまま」鈴木は言葉を切る。そして、溜めて、「そのまま、成仏したんだと思う」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ひとつ、彼女さんから伝言。ありがとう、だってさ」鈴木は役目を果たしたとばかりに小さく溜息を吐いた。僕は、微動だしない。

言葉の意味を理解するのに時間がかかった。

「・・・・・・・・要するにさ」呟いた僕の声に反応する鈴木。「由佳は・・・・・・・・、もういないのか」

少し躊躇ったように僕から視線を逸らす鈴木は、ゆっくりと頷いてくれた。

僕は全体重をソファにかける。指一本動かすのも嫌だった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

暫くの沈黙。鈴木も何も言わなかった。

「なあ。何の意味があったんだろうな」

「え？」

天井を眺めながら言う僕を、鈴木は不思議そうに見た。

「何のために僕は田柄と再会したんだろうな」

「・・・・・・・・何もかもに意味があるわけじゃないだろ。別に、ただの神様の気まぐれかもしれないぞ」

鈴木の答えに、僕はくすつと笑った。「そうだな。神様の気まぐれ、な」

「・・・・・・・・」

鈴木が僕を心配そうに見ていたのには気がついたけれど、僕は天井から眼を離さなかった。

それから鈴木と一緒に鈴木を作ったご飯を食べ、鈴木は帰った。もう外は暗い。

鈴木が帰って一時間くらい経ってから、僕は家を出た。

夜道は寒い。厚着をしてこなかったので、僕は少し縮こまる。

この物語の意味は何だったのだろうか。

田柄との再開に何の意味があったのだろうか。

「なあ由佳・・・・・・・・。ありがとうって、どういう意味なんだよ」
夜空を仰いで、自虐的に呟く。

ありがとう、なんて言われることはしていない。

ありがとう、なんて言われる立場じゃない。

ありがとうと言われるなんて、僕には無縁じゃないのか。

「・・・・・・・・どこだったら、誰にも迷惑かけずに死ねるのかな」

僕の声は、横を通り過ぎていった車によってかき消された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5215t/>

見えない恐怖

2011年11月27日20時55分発行